

# 小千谷 東忠あて大亦観風書簡 二 A Collected Transcriptions of OMATA Kampo's letters to Tochu, Ojiya, Niigata II

福田 道宏

FUKUDA Michihiro

奥村 一郎

OKUMURA Ichiro

高村 佳子

TAKAMURA Keiko

キーワード…大亦観風、日本画、小千谷、パトロネージ、歴史画、万葉集

## 解題

### 大亦観風《万葉歌跡 大和雷丘之図》と新出の《若草山暮靄》について

本稿は、画家大亦観風（一八九〇～一九四七）が、新潟は小千谷の割烹東忠の主人東平三郎（一八九〇～一九四三）、および平三郎の没後には彼の妻ひなに宛てた書簡のうち、一九四一年から四二年二月までの書簡を翻刻紹介するとともに、近年所在がわからなくなった観風作品二点を紹介するものである。割烹東忠には六十六通の大亦観風書簡が残されている。ただし、次々節で奥村が述べるように現在東忠は閉店し、所蔵する観風作品や書簡などについては東忠所蔵というのは正確ではないかもしれない。また今回翻刻の書簡の概要については次節で福田が述べる。観風の生涯と画業の概略、および一九三〇年から四〇年の書簡については本誌創刊号所載の「小千谷 東忠あて大亦観風書簡一」<sup>1</sup>を参照されたい。

観風は、一九四〇年（昭和一五）十一月二十一日から二十六日にかけて、東京日本橋の白木屋五階で第四回個展「万葉集画撰展」を開催している。東忠あての書簡では四〇年三月三十一日付あたりから第四回個展に向けての動きが活発になっていることがわかる。観風の第四回個展開催は、小千谷の東平三郎はじめ、小千谷の有力者たちの後援によるところが大きいことは東忠あて書簡をみればあきらかである。

「第四回観風個展万葉集画撰展覧会目録」（図1）を見ると、同展には、《万

葉集画撰》のほか、《熊野山雨霽》一面、「万葉歌枕風趣」と題する連作十幅《檀原之宮暁色》《畝傍夕照》《春日斜暉》《若草山暮靄》《長谷薫風》《春日野緑趣》《室生寂春》《芳野春光》《唐崎霽夜》《玉津島烟雨》を出品、翌年の大阪三越での個展では《畝傍夕照》に代わり《紫霞莊嚴（談山）》《龍田雨情》《三輪山清暁》《住吉佳宵》《山雲呼雨（筑波山）》《神苑映日》《紀三井寺春趣》《射水川薄暮（立山）》《芳野新晴（宮瀧）》《零雨蕭々》の十一幅と、《万葉嗤笑歌》一幅を出品している。うち現存する《熊野山雨霽》《春日野緑趣》《玉津島烟雨》と現所在が明らかでない《万葉嗤笑歌》は、当時、すでに東忠に納めたものを借り出し、展示したことが書簡から判明している。ほかは長く所在不明であったが、以下、ここでは、近年新たに所在がわからなくなった「万葉歌枕風趣」連作のうちの一幅《若草山暮靄》（図2）を紹介したい。

《若草山暮靄》は、寸法縦五八・八センチメートル、横六七・四センチメートル、紙本墨画淡彩、軸装仕立てで箱蓋表に画題「若艸山暮靄」、箱蓋裏に「昭和十五年庚辰秋聖紀奉祝佳日」とあり、四〇年までに制作されたものであることがわかる。

また、第四回個展の画集に掲載された図版から、本図が目録にも載る『若草山暮靄』であることを確認できる。夕暮れに靄の立つ奈良盆地を若草山から望む情景が、墨の濃淡によって情感豊かに描き出されている。前景に若草山の斜面を配し、軽妙な筆致で律動的に松林を描く。中景には東大寺大仏殿が見える。屋根の下にごく淡い朱で表わされた斗拱が画面にわずかに華やかさを与えている。遠景には興福寺五重塔を描き、さらに、中景から遠景の上空に、夕日に向かつてはばたく二羽の鳥を連ねて描くことで、奥行きをもつ絵画空間を生み出している。本図は、実景に基づきながら、観風の心象を交えて描き出したものと考えられる。



図2《若草山暮靄》

次に、『万葉歌跡 大和雷丘之図』（図3）を紹介したい。本図は、観風没後初の本格的な展覧会となる二〇〇四年（平成一六）、奈良県立万葉文化館における開館三周年記念特別展「万葉を描いた画家 大亦観風展」開催にあたっての調査の際には所在不明であったが、近年その所在があらかとなり、二〇一四年（平成二六）夏に観風の郷里の和歌山県立近代美術館にて催された特集展示「生誕一二〇年大亦観風」で公開された。本図は、寸法縦五五・四センチメートル、横五八・四センチメートル、紙本着色、軸装仕立てで箱蓋表には画題「万葉歌跡 大和雷丘之図」、箱蓋裏には「昭和十八癸未仲秋」とあり、四三年旧暦八月頃ま



図3《万葉歌跡 大和雷丘之図》



[illegible]

図1 「第四回観風個展万葉集画撰展覧会目録」(右)

での作となる。本図が四三年に描かれた作品であることから、観風が第四回個展以降も、万葉の画題に取り組んでいたことがうかがえる。描かれているのは、奈良県明日香村の北西、甘檜丘の北にある標高一一〇メートルほどの小さな丘雷丘<sup>2</sup>。ただしこの標高は、丘が最もよく見える東側雷交差点から眺めた場合、この標高が九九メートルほどなので、現実にはちよつとした庭の築山くらいにしか見えない。

繪は前景に飛鳥川を描くので、西側からの眺望ということになるが、現在は民家が建て混んでいて、このように丘を見ることは出来ない。柿本人麻呂が「大君は神にし座せば天雲の雷の上に廬らせるかも」と詠んだ歌が、観風によって万葉仮名で画面左上に書かれている（図4）。前景の蘆の繁茂する川には鷺であらうか、三羽の白い鳥が飛び立つ姿が描かれている。これは、同じく万葉歌にある「大君は神にし座せば水鳥のすだく水沼を都となしつ」の情景を、柿本人麻呂の歌に重ね合わせたものであることが想定される。中景に雷丘を、遠景には飛鳥から高家、北山から御破裂山へとつづくの山々を描く。本図は、優雅な趣を呈する大和絵調の色彩と、飄逸で、かつ親しみを感じさせる観風独自の南画的表現によってあらわされている。こちらも《若草山暮靄》と同様に、雷丘をのぞむ実景の上に観風の万葉に抱く心象風景を重ねて詩情豊かに描き出したものであらう。

（高村佳子）

## 一九四一・四二年の大亦観風と東平三郎の交友

今回翻刻の一九四一年から四二年第一四半期にかけての大亦観風書簡について、その概略をたどるとともに、この間の観風と東忠主人東平三郎の交友について見ておこう。前稿でも述べたように、観風と平三郎は大正末年か昭和初年に出会い、一九三〇年代半ばになってその交際を深めていく。ここには画家とパトロンという以上の、信頼と尊敬に基づく関係がはぐくまれていたようである。前稿で翻刻した四〇年の書簡を見ると、前節で高村が述べるように、この年の「第四回個展万葉集画撰展」開催の蔭には物心両面での平三郎をはじめとする小千谷の人びとの助力があった。それを受けて翌四一年だが、前年と同じ十通の書簡がある。

一通目の25を見ると、「万葉集画展覧」への援助に対する謝意を述べており、開催直前の十月から十一月、畳み掛けるようにして援助を頼んだにもかかわらず、十一月十六日付で目録のみ送付してから二十一日に開幕以後四箇月にわ

たつて一通も出さなかったようである。その間、二月頃に個展で借りた作品の返却と依頼作品の納品も兼ねて小千谷に行くつもりで、小千谷の後援者のひとり高野なる人物にもその旨伝えたようだが、長らく無音だったことと二月中に行かれなかったことについて言い訳も書き送っている。ひとつは、一月三日から月末まで風邪と胃腸の不調で病臥したこと、もうひとつはその病気で一月七日ころから、この年の「万葉集画撰展」の大阪展の準備のための大阪行きが延びたこと、そして予定の遅延により二月に描くはずだった依頼作品の制作がずれ込んだことである。

本書簡では大阪展についても述べるが、二月中旬に現地で相談をして大阪三越で五月下旬か六月初旬に決まり、「いよ／＼関西へのり出」すと張り切っている様子が見て取れる。さらに展覧会後の《万葉集画撰》の納め先として万葉のふるさと奈良の地の「橿原神宮の国史館」を前々から考えていたようである。大和国史館は佐佐木信綱らの提唱で橿原神宮外苑に設けられた施設で、戦後歴史館と改称。のちの県立橿原考古学研究所付属博物館・県立橿原図書館（現県立図書情報館）の前身である。「明治神宮の有馬大将」は和歌山出身の海軍大将で明治神宮宮司の有馬良橋、面会したという「奈良県の知事」は四〇年十一月から四二年七月在任の第二十六代知事の山内逸造である<sup>3</sup>。

手紙を認めている三月二十六日時点では小千谷の五名分の作品を制作中で一週間以内、四月二、三日ころには完成するから持参するという。希望の画題をすでに聞いているというこの作品は五人と言っている、前稿所載の前年の書簡で個展への資金援助を頼みたいと言っていた後援者高野・小出・照専寺・田中の各氏に平三郎を加えた五名であろう。とすれば依頼作品というよりも後援に対する作品だろう。また、個展以降、「美術の雑誌から（いろ／＼な）万葉についての文章の寄稿をたのまれて、毎月かいたりしてあまして、そんな事でも忙し」<sup>4</sup>という。

同月二十九日付の26によれば、小千谷訪問の日程についてすぐ返事があったようで、前便で書き送った希望どおり四月二日、三日となったらしい。《万葉集画撰》を持参して、小千谷の後援者たちにお披露目するよう依頼があったらしく、三日の日に東忠で展示することになった。また、滞在中に作品制作してはと提案されたいが、大阪のため新作も描かねばならず、また二、三日の滞在でやつつたように思われたくないし、一生懸命描きたいからと予約だけ取ることにしたいと書き送る。小千谷から戻って間もないと思われる四月七日

付の27は扁額に貼り込まれ、割烹東忠の囲炉裏端に長年飾られていた。この手紙には観風の長女百合子・長男博彦の絵入りである。子どもたちは観風が小千谷から持ち帰ったお土産によるこび、描いたらしい。親バカと言えればそれまでだが、それを敢えて選んで額装にする平三郎との親交が見て取れる。

四月十六日付の28は三月二十九日付26の封筒に入れられていて、もとの封筒はない。「中支御慰問」は東平三郎が中国戦線に慰問団に加わって出掛けることを指している。その出発の直前にもかかわらず、本書簡の主な内容は大阪展に向けての頼みごとである。現存の《熊野山雨霽》について26で、東京展と同様、出品したいが、遠方のため破損が心配なので諦めようかと言っているのに対し、平三郎の好意で、これを掛幅に改めてもらえるという事になったらしい。表具の裂地についても観風から注文をつけている。「橋立」は天橋立を描いた《橋立烟雨》である。図入りで説明する《万葉嗤笑歌》は現在見当たらないが、《万葉集画撰》のなかにも同じ歌が絵画化されている。「子供のつまらぬ絵」という件りは、先述のとおり27を額にしようと平三郎からの手紙にあったのだろう。固辞しているが、実際、扁額に仕立てられることになった。同月二十六日付の29では平三郎の中国行きの慰問団の結成式か壮行会かの集合写真と平三郎のポートレートが送られたのを見てのものと思われ、その会場で背景に写っているもので験担ぎをしている。また、小千谷からの慰問団一行八人はいったん東京に出て「青年会館」に泊ったのち出発だったようで、会いに行く旨、伝えている。

つづく30・31（前稿翻刻2三八年一月二十一日付に同封）は、平三郎の留守宅にある妻ひな宛の留守見舞である。五月十八日付の30は上野駅で出迎えたこと、翌日妻ともども東京駅で見送りをし、妻が心づいて国旗を持って来ていたのでそれを振って万歳で送ったことなどを報告し、大阪展出品のため借用を頼んでいた作品を小千谷の表具屋が東京まで届けに来るという件について、来るなら日時を知らせてほしいと依頼する内容。翌日の31は葉書で、表具屋が同日朝届けに来て、会って受けとることができた旨、知らせるものである。30に言う「千谷川への表具」だが、千谷川は小千谷市内の町名で、これ以前にも表具屋と考えられる「表勇」が頻出するので、その所在地で呼んだものかもしれない。六月十三日消印の32は大阪から大阪展の目録（印刷）を送ったものである。手紙が同封されていたかは不明だが、残っておらず、もともと目録だけ送ったものかもしれない。



その後、しばらく手紙を送らなかったものと見え、つぎの33は五箇月後の十一月二十二日付である。四〇年十月二十五日付(前稿翻刻22)を同封し、切手が失われており消印からは二十二日ということしか読み取れないが、内容からみて四二年だろう。ここに「八月御厄介になり」とあるので、この年も小千谷を訪ねたらしい。そこで依頼を受けた「松月氏への「鐘馗」、山本三治郎氏への「古代の機織」と「海と鶴の図」と東忠のため新春向けの「松鶴旭陽の図」を、平三郎方に別送したことをしらせる内容。「松月」は小千谷市平成に本店を構える松月堂喜三兵衛であり、二〇〇四年奈良県立万葉文化館における「万葉を描いた画家 大亦観風展」でも、右の「鐘馗」とは別の所蔵作品を出品していただいたほか、観風原画の菓子包装を用いていた。東忠のための作品は『万葉集』最後の歌、大伴家持の「新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事」を主題にしたといい、《鶴 新しき年の始の》である。山本の二点は現所在が分からないが、古代日本に朝鮮半島から機織が伝来した逸話を描く歴史画であり、伊勢神宮の神宝を参考に描いたという。「万葉集画撰を本として出版」と書くが、実際には四三年に刊行される。「大阪展もすみ、奉納も出来」とあるが、大阪展は四一年六月、大和国史館への奉納は四三年二月ごろなので「奉納も出来」は済んだということではなく、奉納が決まったという意味か。なお、松月堂と山本依頼の三点に関して、画料を伝えて集金し、送金するまでを平三郎に頼んでいる。つづく十二月十八日付の34をみると、平三郎からの返事はすぐにはなかったものらしい。それにつき、前回手紙とは別送した四点はいずれも相当の自信作のはずだし、平三郎の機嫌を損ねるようなことは書いたつもりもないのだが、と心配している。このあたりの経緯は二年前の三九年十月九日付書簡に返事がなく同月二十九日、十一月八日に手紙を出した経緯(前稿翻刻9・11)の再現のようだが、返信がなかった理由のひとつは平三郎の病氣らしい。このあと翌年の書簡を見ていくと年末にかけて一時はかなり重篤だったようである。にもかかわらず、松月堂と山本分の画料は回収して送ったものと思われ、このあとその件には一切触れない。ひととひとの交際において、自分のたまの無沙汰を棚に上げ、返信がないと心配する相手との付き合いは大変だっただろうが、それでも交際を続けるふたりの親交のほどともに、平三郎の間としての器量の大きさがよくわかる。

年があらたまって四二年一月十九日付の35では、平三郎の体を気遣う内容である。病氣だったことと快方に向かっていることを年末年始ころまでに報らさ

れたのだろう。平三郎から食糧難の東京を案じて食品などさまざまなものを送ってもらったらしい。さらに「入門の御しるし」、つまり束脩が同封されていたらしい。これは前々から観風から提案しており、この年本格化する小千谷で同好者を募って通信教育で指導を受ける会のはなしの前段と言えよう。また、師小室翠雲と関西に旅行する予定があったことも書面からわかるが、翠雲の体調不振で延びていたという。以後も、平三郎からたびたび食糧などを送ってもらっている。このころ、観風の妻も病臥したりしていたようで、養生のためにも送っていたのだろう。36・37はともに一月二十六日付である。前者でさきに送ってもらったパンをついでの際にまた送ってほしいと依頼し、投函後、入れ違いに食糧品が平三郎から届いたらしく、その受け取りとパンの無心の詫びである。二月十五日付の38でも「度々御結構なるもの御送りいたゞき」とある。前便で平三郎に知らせたように、この二月一日には観風が主宰していた画塾の新春の試筆会があり、その当日にも平三郎から荷物が届いたらしい。しかし、妻の病氣や依頼されて学校で行ったという講演会などに忙殺されて、二週間返信が遅れたと言いつづけている。

このあと、この年の夏、観風は東京の門人たちと連れ立って湯沢に行き、平三郎と落ち合うことになる。紙数の都合もあるので、三月以降の分は次号で紹介することにした。

(福田道宏)

### 東忠のその後

創業は江戸時代中期と伝えられる小千谷の老舗割烹「東忠」。十代にもわたって小千谷の歴史をみつめてきた「東忠」だが、地場産業の停滞や個人消費の悪化などによって利用客が減少し、経営不振から二〇一六年(平成二八)九月下旬頃に営業を停止した。私たちも二〇〇四年「万葉を描いた画家大亦観風展」以来、何度かお訪ねし、十代目の東亮一氏と女将の八重子氏ご夫妻にはたびたびお世話になった。

二〇〇四年一〇月の中越大地震で大きな被害を受けながらも、多くの支援を受けて半年後には再開し、その伝統を守り続けていたが、終におよそ二五〇年にわたる歴史に幕を閉じることになった。

「東忠」は、北戊辰戦争の一場面にも登場する歴史的建造物としても知られる。二〇一五年には、江戸末期建築の本館、昭和前期建築の別館、明治前期建築の土蔵が、国の登録有形文化財に登録された。

一度休業した「東忠」だが、文化財として保全することの重要性、そして閉店を惜しむ市民の声を受けて、二〇一七年三月には、財団法人小千谷市産業開発センターが土地と建物を取得。民間会社に運営を委託し、五月には「居食亭東忠」として営業を再開している。

小千谷市産業開発センターによれば、観風の作品や書簡類は散逸することなく現在の「東忠」に残されているという。建物とともに、地域の文化の歴史を刻む大切な資料として、ぜひ守り伝えて欲しいと願う。（奥村一郎）

## 凡例

一、掲載順は現存のものの年代順とし、不明のものは内容などをもとに推定し配列した。

二、かな遣い等は原文のままとしたが、旧字等は現在通用のものに改め、句読点を補った。また、誤字・当て字や、意味の取りづらい箇所については、当該箇所の右傍に「」内に正しい字やふりがなを補った。

三、不適當と思われる表現も、当時の時代状況を考える上で貴重なものと考え、原文のままとした。

四、個人情報にかかわる、公刊に不適切な箇所は一部略してある。

五、書簡の翻刻は福田・奥村が行い、高村・福田で校訂を行った。

翻刻——一九四一年から一九四二年二月——

一九四一年（昭和一六）

25 三月二十六日付

拝啓。其後、すっかり御無沙汰申上しました。皆様御丈夫ですか。御地はまだ雪深い事と存じます。こちらはもう四月にちかく、少しは楽になりました。

昨秋は誠に展覧会の節は種々御力を給りまして御礼の申上様ありません。御無沙汰をして居りまして、心では常に感謝を致してゐるのですが。さて、二月頃には作品を持参してと心にきめて居りましたので、高野様へも二月に伺ひますと申上げた事でしたが、どうも予定は思ふ様に行かないものでして、一月の三日から風邪の上へ胃と腸の病氣になつてしまつて、三日もつゞけて寝た事のない私が、一月も終るころまで病臥してしまひまして、全く弱りました。去年の秋、個展の多忙さと、旅行からの引つゞいての制作とで、だんだんに弱つてゐたのかもしれない。然しもう大丈夫です。実は予定のつもりでは、一月

の七日頃に大阪に行つて、大阪展の準備も相談して来る筈だったのが、病気で仕方もなく寝てゐたので、回復してから二月の中旬から関西に行つて来ました。これが一月中に済んでゐましたなら、御地への作品を二月にかけて、持つて伺ふつもりだったのですが。こんな次第で、何卒不<sup>あしからず</sup>悪御願ひ申上します。

大阪では五月下旬か六月始め<sup>四</sup>に大阪三越で又、展覧会を開く事にして来ました。いよく関西へのり出します。それから、あの「万葉集画撰」といふ長いのは、その後、大和の橿原神宮の国史館へ奉納する考へがありましたので、明治神宮の有馬大将に紹介して頂き、奈良県の知事にも面会し喜んで受けてくれる事になり、奉納の約束をして参りました。

さて、これから又、大阪への作品を一生懸命にかきにかゝる処です。

処で、御約束の御地の五人の方の作品、之は只今、揮毫中です。この先一週間位もかゝれば出来るかとも思ひます。四月の二、三日頃にまで出来ればと一生懸命にかいて居ります。完成しますとすぐ持つて伺ひます。この前、大体、画題の御希望を伺つて居ましたから、それに合ふ様にして居ります。

就いては、そちらのご都合も御座いませうから伺ひ度いのですが、何日頃がよろしいでせうか。一度御宅でも展覧して御覧頂いて、それ〴〵納めて頂ければと存じます。どうか皆様と御打合せ下すつて、すぐ御返事願度存じます。それで又、御厄介ですが、一晩だけ御厄介願つて、翌日の夜行で帰れ、ばと存じます。処で今は何もかも配給制度の場合、御迷惑でせうが、御宿だけ願へれば結構です。

それから拝借の衝立。どうも遅れまして相すみません。近日、御返送申上げますか、持参しますか、どちらかに致します。持参出来れば持参致します。あの作品、那智の滝のこと、どこへ行つても一番いゝとの評判で喜んで居ります。

この程も翠雲先生に逢ふと、個展の評判は中々よかったねとの事で、「あの「万葉画撰」を見て、非常にいゝ。南画と大和絵の中間を行つて、氣品があつていゝ。之はおせじではないんだ」などと盛に喜んでくれてゐました。まあ喜んでくれ、ば何よりです。然し、之も結<sup>結句</sup>極は貴家はじめ皆様方の御尽力を頂いたお蔭で開催出来た結果と感謝致して居ります。皆様にもよろしく御申上げ下さい。

あの個展以来、美術の雑誌から（いろ／＼な）万葉についての文章の寄稿をたのまれて、毎月かいたりしてゐまして、そんな事ででも忙しく。マア少しづつ、面白くなつて来ました。

何れお目にかゝりまして種々申上しますが、不<sup>ちりあえず</sup>取敢右まで。

御都合のよろしい日がきまりましたら、御報知願上ます。四月の二日か、三日かに上れ、ばい、と思ひますが、その日などは御宅は御忙しい事でせう。その後でも結構です。

乍終、奥様にわけてよろしく。皆様にもよろしく願上ます。

三月廿六日夜

大亦観風

東平三郎様 侍史

御地は今年、雪は如何です。まだ非常に寒いのでせうね。途中、雪崩が心配ですね。参考をおきかせ下さい。

「封筒、消印「16. 3. 26」、切手は封筒に入れてある」

越後小千谷町下町

東忠楼

東平三郎様 親展

「封筒裏」

三月廿六日夜

## 26 三月二十九日付

拝啓。只今、御親切なる御手紙拝見。何時も乍ら感謝の他ありません。さて、御照会の件、大変結構と存じます。神宮に「万葉画撰」を奉納してしまひますと、もう機会がありませんから、三日に見て頂ければ何よりです。大きいので持はこびには困難ですが、持参致します。夜、それについて制作の主意やら旅行の話やら作品についてやらの御話を致しませう。皆ひろげると四十間ほどありますから、よろしく願ひ上げます。説明書も持参致します。一つ一つ紙で張りつける処を御心配おき下さい。

作品の方いろ／＼(半折のこと)御心配下さいまして難有存じます。何卒よろしく御願ひ申上ます。然し、こんどは大阪のを又、新しく描かねばならぬので、予約だけをおとり願へませんか。甚だ勝手で恐縮ですが、二、三日の旅行で描いて帰ったと云はれるのもどうかとも考へられるし。作品は真面目にい、のをかいて差上げたいと思ひますから。

衝立の事。あれは大阪展にも欲しい事もほしいのですが、道中が長いので心配でもあるし、東京の様に表具屋に任せておく事も出来ず、従つて損傷する事

も予想されるので、大阪は、持運びの楽な掛物だけになりたいと思つて居ります。兎に角、四月二日に伺ひます。何れ拝顔の上、御礼申上度と存じます。では要のみ不取敢。奥様によろしく。

二十九日夜十一時

大亦観風

東平三郎様 侍史

「封筒、消印「16. 3. 30」、切手は封筒に入れてある」

新潟県小千谷町

東忠

東平三郎様 侍史

「封筒裏」

三月廿九日夜認

## 27 四月七日付(扁額装)

拝啓。この度は誠に御厄介を相かけ申候。御多用の処、御暇か、せを致候。殊に展覧会御案内その他の費用、又当夜御祝宴、連夜の数人のおもてなし、何とも御懇情の極、御礼の申上様も御座無候。又、奥様にはいつも乍ら御厄介相かけ、夜おそくまで御迷惑をおかけいたし、嘸かし御寝不足なされ候事と存じ、御わび旁々厚く御礼申上候。

又、殊に大阪展への御援助を賜り、是所肝銘罷在候、又持参作品の御抽籤の際の御懇情重々御芳志、感謝此事に御座候。

これこそ記念の意味にて参考書籍の購入に資し可申候。こゝに難有厚く御礼申上候。

又、御二人にて御見送りを頂き、恐縮千万に御座候。御令閨様にわけてよろしく御申上被下度候。又その際は御心尽しの御土産沢山賜り、難有く御礼申上候。五日の午後三時半上野につき候が、雨降り居り候。自動車の待合せにて四十何番目の札をもらひ、待居候て一時間後、やうやくのり申候。やはり目黒までは余り可申、東京駅にて下車、又、乗りかへて帰り申候。帰宅いたし候へば、御心尽しの御土産賜り候事とて、家内・子供達大喜びいたし候。お父様はあんまりよくばり過ぎると皆からしかられ申候。お砂糖・メリケン粉の沢山頂き候には家内大喜びと同時に気毒かり申候。子供はお餅とあん餅とに大喜び



いたし候。

この図は一番うれしかった事をかき、おち様・おば様にお見せするのだからと申候へば、尋常一年がお皿のあん餅をかき申候「図5」。下のギザは皿の模様の由、説明しながらかき申候。次の図は姉の方がかき、お母様がお砂糖に大喜びし、アタシがあんまり沢山で驚いた処と申候「図6」。前の魚形水雷の様なのが、高野様より頂き候鮭かと存候。

何れ家内よりも御礼申上べく候へ共、不取敢<sup>とりあえず</sup>右御礼まで。草々。何れ皆様へも御礼状差上<sup>ついで</sup>可申上候共、御序でよろしく御願申上候。

四月七日

敬白

中支御慰問御成功祈上居候、御身御大切に願

上候。

大亦観風

東平三郎様

御令閨様

御座右

28 四月十六日付

拝復。御手紙拝誦、難有存じました。中支御慰問の事、いよく県より御指令の御由、何よりも嬉<sup>よろこばしく</sup>しく芽出度、御出発を御祝ひ申上ます。嘸<sup>なほ</sup>かし御多用の事と拝察致して居ります。只、御身体の方だけ呉々も御自愛被遊<sup>あそびまわ</sup>様、祈上げて居ります。時間ギリギリで飛び廻らなければならず、トラックなどで悪路を行く事もありませうから、胃の方をしつかり御用心願ひ上げます。これは特に御自愛願上ます。それに水・食物がかはりますから、これも。気候は大分よい方へ向ひませうと思ひますが、これとても大陸は昼と夜とが違ふ様ですから、充分御注意を御願ひ申上ます。御身体の方面だけ特に御自愛被下<sup>くだ</sup>は、後は軍隊の教養を受けた方のこと、心配のない事と思ひますが、何卒、御慰問の壮途を完全に果たされる事を祈上げて居ります。県の方から指令があるといふ事は、矢



図6 長女百合子の絵

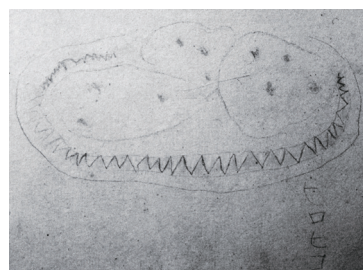


図5 長男博彦の絵

張り絶大な信用がある証として嬉しい事に存じます。記念の写真拝見を心待ちにして居ります。

1さて次に大阪展の事ですが、表具になるのならば、那智の滝も拝借致度、額で送るのと違って心配も少いことですから。御願ひ致します。是非御待ち申上げます。

2橋立も拝借御願ひいたします。

3次に此程、拝借御願申上げるのを忘れましたが、一昨年かいて差上げましたヨコモノ「万葉嗤笑歌」といふ、万葉の歌で色の黒いのを笑つた処をかけた絵が表具されてましたね。上記の様な図です「図7」。細い処は忘れましたが、三人、天平時代の人物があつて、小さいのが怒った様な顔をしてゐる図です。(表具はあれで結構です) これを一処に、都合三幅拝借願ひ度いのですが。何卒、よろしく御願ひ申上ます。期日は未確定ですが、表具の仕上げを五月中旬マデに、そして小生宅へ二十日に到着する様に願ひ度いのですが。

処で、滝を表具なさるのでしたら、此の前の額の時の裂地の色合が画とよく調和してゐたと思ひますから、ハシ切を色見本として御送り(同封)申上ますから、御参考に願ひ上げます。この切地はつまらぬものですから、たゞ色の配合の為です。中味の金地が非常に強いので、すぐそばへあてる切地は、こういふウス緑のシブイ色がよく似合ふと思ひます。目にた、ぬ位の金入りか何かで。こゝの切地です「図8」。次に上・下は中廻しの色と、又、画の金地と調和のよい色、少し中廻しより濃い別系統の色がよいでせう。大幅ですから、会場で人目を引く事と存じます。何卒、よろしく御願ひ申上ます。

此程の御手紙、子供のつまらぬ絵、額では恐入ります。御手紙もつまらぬ文字ですから、愧かきです。どうかそのまゝに願上ます。

いろ／＼実に絶大な御後援感謝の外ありません。表勇の方へよろ

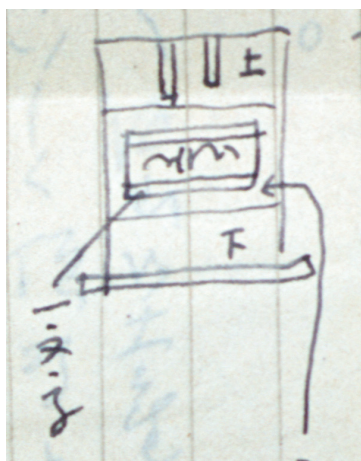


図8 表装見本「こゝの切地です」



図7 万葉嗤笑歌



しく御伝へ願ひます。可成大急ぎで願ひ度く思ひましたので、速達にいたしました。先達、いろいろ沢山御土産頂戴いたしましたので、皆、大喜びでおいしく頂きました。厚く御礼申上ます。乍終、奥様によりしく御願申上ます。では、無礼申上ます。

四月十六日

御壮途を祝福しつゝ、

大亦観風

東平三郎様 侍史

「封筒なし。26に同封」

## 29 四月二十六日消印

拝復。御手紙と記念の御写真拝見いたしました。肖像写真の方も非常に健康らしく、実に立派で何よりです。どうか御自愛しながら、よく皇軍の慰問をして上げて来て下さい。上京の期日がきまつたら御一報下さい。一晚、青年会館(どこですか、青山のですか)へ宿泊されるのだったら、晩にでも訪ねて伺ひます。又、翌日夕方出発の時は、是非御見送りを致します。この壮途を御喜びの心持で御見送りたいと思ひます。今、朝から晩まで又、夜も一所懸命描いてゐるので上野までの御迎へは仕にくいかもしれませんが、一泊される場所が御決りでしたら、所を御しらせ下さらば、夜伺ひます。然し、夜、八人の皆さんの為に御都合が御ありならば(見物とか、散歩とか、買物とか)、差ひかへますが。又、出発(東京駅の)の時間がわかりましたら、御しらせ下さい。速達か何かで。

写真は富士山の壁画の前で撮られた事は、何より意味があつて結構でした。西新さんの御喜びも又、さこそと思ひます。後ろにカレンダーが8の字があり、8が八で末広がりでよい処へ、慰問団の婦人が八人。八紘一字で、監督の一字の下に入るといふ様な事にもなる。時計の2時を合すと10になって、十全といふ事、完全、円満をいふ事にもなる。マアこんな迷信のやうな事は別にしても、日と時間がわかつて意味があつていゝ。も一つ慾をいへば、左の上の「方位」といふ上に「宮城」とあつたと思ひますが、それが出れば尚よかつたと思ひました。謹厳な感じが出た事と思ひますね。吉がキロになるナラ尚更ですね。

さて、次に表具の方、急に御厄介をおかけする様で相すみません。今、表勇に行つてゐるのは、滝と橋立ですね。も一つ、この前の御手紙で御願ひしました万葉の横もの(箱はいりませんから軸だけを一処に)を、序でに表勇へ御あづ

けおき願ひます。

それから、わざわざ表勇が持参の様ですが、これは余り御迷惑をかけすぎて恐縮です。頑丈な箱なら大丈夫でせうと思ひますが。大阪行は自分で持つてゆく筈です。大阪の事いろいろ御配慮難有御礼申上ます。マアよくやつて来ます。表勇の事、承知しました。何れお目にかゝりまして。

次に思ひつきましたが、支那の要人達に会つた時、皆に字など書いてもらつたら記念にいゝと思ひますね。立派な帖を持つていつては如何。

奥様によりしく。では不取敢。

大亦観風

東平三郎様 侍史

「封筒、消印「16. 4. 26」、「速達」」

新潟県小千谷町古町

東忠

東平三郎様 親展

「封筒裏」

四月二十六日夜、午前一時認

## 30 五月十八日付

その後、御ぶさた致しました。御主人様、目出度御出発、殊に御健康の御由、何よりと存じます。此程、上野のプラットで皆さんのリュクサック姿を見て、これは仲々大変の事だナと思ひました。一寸さげて見ると、四、五貫もある様で。私の家内などだったら五分間も背負つたらもう病気になるだらうと思ひました。その翌る日、家内が是非、駅まで御見送りと申し、私の気のつかぬ内に歓迎の国旗をもつて来てゐたので、之はいゝ、処へ気がついたナと思つて、出発の時にさかんに振つて万歳をいったことです。私が発声したので、他の人も一しよにいつてくれました。元氣でたゝれた事でした。駅で渋谷の御妹様にも御目にかゝりました。

「幅もの」といふのは、小千谷の獅子舞をかけたものです。私が持つて伺ひませう。

丁度、夏頃御帰りの様ですね。

私はいま大阪三越での用意で忙しくして居ります。又、千谷川への表具は展覧会ので拝借の為、いろ／＼御厄介おかけしました様で恐縮です。表ぐやが上京の時、一寸先キニ葉書を頂かないと、今忙しくしてゐるのでするの時もありますから、先きに葉書を表具やから出す様に御申つけ願ひます。

御主人はもうど／＼予定の通り進行されてゐられる事でせう。お達者なのが何よりです。御留守中、御骨折の事と存じます。家内よりも一度御便り差上げたいと申して居りましたが、家事でとりまぎれて居りまして失礼して居ります。先ハ御留守御見舞旁々、右まで。草々。

大亦観風

東御夫人様

「封筒、消印「16. 5. 19」」

越後小千谷町古町

東忠

東ひな御夫人様

「封筒裏」

五月十八日

### 31 五月十九日付はがき

拝啓。昨日御手紙差上候処、今朝表具や参り候。丁度早朝とて在宅にてよろしく候。たしかに拝借仕候、厚く御礼申上候。その節は御宅様よりの細々と御土産、恐入候。子供の御菓子まで御頂戴いたし何とも難有御礼申上候。只今、毎日子供のおやつなき為、困り居り候事とて大喜びに御座候。いろ／＼何より難有存候。千谷川にハ小切一枚かき、同時に御主人御不在中の御見舞の心持にて藤と鹿の小品一枚かき、もたせ上げ申候間、御高覧被下度候。「美術雑誌」も一冊持帰りの候間、御高覧被下度、御主人様にも御見せ被下様願上候。先ハ御礼まで。草々

「表」

越後小千谷町

東忠

東御夫人様  
十九日

東京中目黒三ノ九六〇

大亦観風

### 32 六月十三日消印万葉集画撰展大阪展目録（印刷）

大亦観風

万葉集画撰展覧会

万葉集画撰序歌

たたへうた

わが山川よくうつせりとやまとの大国みたまうけたまふらし  
わがどちをよくゑがけりとやまがよひ万葉人らゑみつつあるらし

同跋文

小杉放庵

万葉人大亦氏

万葉は本朝歌道の聖典、集として最も古く又常に新らしい。そこには吾人祖先の歓喜悲愁が、現在の如くに生動して居る。題材として非常におもしろいものであるにも係らず、画家の筆を万葉に着くるものまことに少ない。万葉の時代を知り、万葉の人を理解し、万葉の歌を味得せねばらず、之れ相当以上の努力と知識と熱意とを要するからだ。

大亦氏の万葉数十題の連作は、此の点で実に驚嘆に値ひする。万葉の時代と人とを調べる事、わが家の親戚を訪ふが如く、万葉の地の旅は故郷に帰るが如く、愛情と憧憬とが、此の数年の研究と制作との熱意の源泉であつたらうと思ふ。いにしへの人にわれあれや、といふ万葉歌があつたが、大亦氏はまさしく此の万葉のいにしへ人であつた。

作品

万葉集画撰 一幀

紙本 絹一尺一寸五分  
全長三十八間縦一尺四寸

万葉嗤笑歌

幅 紙本 縦一尺八寸  
絹一尺三寸

（歌枕風趣）

春日斜暉

幅 紙本 二尺一寸五分  
絹一尺二寸五分

龍田雨情

同

若草山暮靄

同

三輪山清暁

同

春日野緑趣

同

住吉佳宵

同



室生寂春	同	山雲呼雨(筑波山)	同
玉津島烟雨	同	満山緑風(信貴山)	同
唐崎霽夜	同	神苑映日	同
長谷薫風	同	紀三井寺春趣	同
吉野春光	同	射水川薄暮(立山)	同
檀原之宮曉色	同	芳野新晴(宮滝)	同
紫霞莊嚴(談山)	同	零雨蕭々	同
熊野山雨霽	同	絹本金地 <small>中三尺三寸七分 横二尺八寸五分</small>	

昭和十六年六月

大阪(越)三越

「書き込み」

「万葉歌枕 香久山に就いて」於大阪BK放送局六月十六日夕五時半、大赤観風放送

「封筒、消印「16. 6. 13」」

越後小千谷町下町

東忠

東平三郎様

大阪三越にて

33 十一月二十二日付

拝啓。秋も深くなりました。其後、御無沙汰申上しました。八月御厄介になりました。以来、多忙にまぎれて御無音を致し失礼して居ります。東京は今日は雨、寒い時雨です。庭の楓も赤くなりました。御地は最早、冬の支度のかこひも出来た事と想像をして居ります。これから囲炉裏のそばの四方山話も楽しい事と思ひます。あんまり御無沙汰をしましたので、何から御話してよいかに迷ひますが、この夏御依頼を頂きました松月氏への「鐘馗」、山本三治郎氏への「古代の機織」と「海と鵜の図」、漸く出来上りましたので、本日御宅宛御送り申上しましたから、それ〴〵御面倒ながら、よろしく御願ひ申上します。その中に又、貴家の迎春の御慶びにもと「松鶴旭陽の図」一作同封申上しましたから、奥様共々御高覧被下ます様、願上します。御居間に懸けられた時を想像して楽しく

かきました。今度の四本の作品は、何れも相当の努力をして、その出来栄へも甲斐があったかと思つて居ります。

松月様の「鐘馗」は見た処、カンタンですが苦心しました。これが二枚目です。細い画面へ雄大に描かうと思つて、又、気品も持たせ度く思つて努力をしました。こういふ風なもの、大体がきまったもので、五月頃、人形屋に売出される様な下品なものにしてはならぬと、それを特に注意したのですが、幸ひ一寸うまく行つた様に思つて居ります。賛は「高低に宝剣をめぐらせて邪魔を切る」であつたか「除く」であつたか忘れましたが、さう云ふ意味です。

御宅のは「日の出に鶴」で題は平凡ですが、少しでも観風流に平凡をぬけやうとして見ました。思ひ切りのばした羽の鶴、大陸の空もかけめぐる颯爽たる姿として新年に御かけ下さい。歌は万葉の同伴の家持が正月に雪の降つた時によんだ歌。意味は「この新年の初春にふり積つた雪の様に、尚よい、めでたい事がもつとく積れ」といふ歌です。

あ・ら・た・し・き・年・の・始・の・初・春・の・今・日・ふ・る・雪・の・い・や・し・け・吉・事

この画面には雪がありませんが、白鶴をもつて雪にたとへたつもりです。

次に山本様の鵜の方、これも軽快に成功したかと思つて居ります。それから非常に苦心したのが、御注文の「古代の機織」ですが、大きいものとの御話でもあつたし、どうも機をかくと尺五では一ぱいになってしまひますので、尺八に致しましたが、画面が大きくなるので相当苦心しました。これは応神天皇の朝、はじめて呉の国から、呉織・穴織くればとり あやはとりを迎へて機織を盛にした、その呉織の図をかきました。この機は、伊勢神宮の宝物にある日本の最古の形です。日本には天照大神の頃から機はあるのですが、それは形がわからないが、遺物にあるものとしては恐らくこれが最も古いものでせう。この由を山本氏に御話し被下い。

次にこの九月から例の「万葉集画撰」を本として出版することに日夜没頭して来しました。幸ひ翠雲先生も金も出すし、会員も作るからとの事でしたので、努力をして来ましたが、丁度これに着手し出すと、大阪の出版会社などが三社も同時に出版させてくれ、是非にとの事になり、損得をかまはずに国家の文化に尽す意味ですとの熱意に動かされて、丁度婿三人の格恰でとう〴〵義理のわるい思ひをしなから、錦城出版会社の方に決定して、今、とりかゝつた処です。

本はタテ一尺二寸、ヨコ八、九寸の大きなもので、原色版が二十枚も入り、後は全部写真版の豪華版です。まだわかりませんが、値段は二、三十円の本でせう。発行は来年三、四月頃でせうと思ひます。これでマア大阪展もすみ、奉納も出来、出版（画集）も出来るといふ次第、第一、第二と着々目的を貫徹が出来て行つてゐることが愉快にたへません。然し、之も蔭の皆様の御力と感謝して居ります。決して自分の力で出来てゐると思つて居りません。全く皆様と神様との御力を感じてゐる次第です。之でやつと御後援の方々の御出資を願はなくとも出来ることになりました。又、師匠に出資もたのまなくともよい事になったので、方々へ御迷惑をかけずにすむ事を喜んで居ります。

次にこの前、御願申上げて置きました屏風の方、如何でせうか。一つ六曲一双を次の展覧会の作品として描き度思ひますが、御送り願へませんでせうか。長井様の方の紙ではれると尚、結構ですが、それも大変でしたら、紙は東京で張らせても結構ですが、あの屏風の絵は一先づはがして保存しておいて頂いて、あの下地を利用して頂ければと思ひますが如何。送つて頂く時は屏風の箱はいりません。かならずこれからです。半双半双別々に荒箱、こも包みに願ひますと反つて軽いから破損しませんからよいかと思ひますが。何卒御願ひ申上ます。御高見御伺ひ致度存じます。御返事待上ます。

次に誠に御面倒入りますが、松月氏の「鐘馗」の画料五拾円、山本氏の「岩と鶴」の方五拾円、山本氏の「古代の機織」の方、尺五並として百五拾円で結構ですから、よろしく御伝へを願ひ上げます。この辺、貴家の方から宜しく御話を願つて、特別のことにしてあるからと御伝へを願ひ度存じます。御多用の処、御面倒ですみませんが、御受取り被下つた節は、私方の振替口座へ御振込頂いて結構です。番号は「東京 四二三七〇番」です。

どうも画料のことをいろ／＼申上げて何やら変ですが、不<sup>あしかず</sup>悪御願ひ申上ます。何時も御厄介ばかり御かけ致しまして相すみません。作品四点は一度、画室へかけ並べて、御宅で皆様が御高覧被下<sup>くださ</sup>り時<sup>くださ</sup>のことを思ひながら、あちこち手を加へ、そして御送付申上げました。

だん／＼又年末も迫つて参ります。どうか御身体御大切に願上ます。乍終、奥様へよろしく。

いよ／＼日米の間もせまりさうですね。断乎としてやるべしと私は思つてゐますが。では又、諸氏によりしく。

十一月二十二日

大亦観風

東平三郎様 侍史

「封筒、消印「目黒□□□□」 22」

新潟県小千谷町下町

東忠

東平三郎様 侍史

「封筒裏」  
十一月二十二日

34 十二月十八日付

拝啓。その後久しく御便りを頂かず御案じ申上げて居ります。御健康でもと御心配を致して居りますが、相かはらず御元氣、御活躍中ならば何よりと存じます。奥様も如何御暮し被遊<sup>遊ば</sup>ますか。

さて日英米の開戦。その劈頭、海軍の威力を發揮し大勝。思はず万歳が出てしまひました。難有うと感謝にあふれた言葉が自然に出て参ります。戦争になつて反つて気分が明るくなつたといふ有様。毎日、新聞とラヂオにかちりつく次第。御地も御同様の事と存じます。これで心つよい、明るい、元氣にみちた新春を迎へられますね。

さて又、新年を迎へますが、此程御送り申上りました旭陽舞鶴のもの、御床の間に御かけ被下<sup>くださ</sup>り幸甚と存じます。処が久しく御返事を頂かないので、年末のことだから到着しないのではないかと案じたりして居りますが、若し不着ならば早速取りしらべますから、一寸御葉書を頂き度存じます。その後、松月・山本両氏にも一寸通知だけはしておきましたが、何れも便りがないので、或は不着かとも心配いたして居ります。先便に申上りました様に、皆一所懸命にかきましたものなので、御感想でも何とか伺ひ度く思つて居ります次第。段々色々考へて見ると、或は御手紙中に何か御氣持をわるくされる様な事を書いたかとも案じ出し、いろ／＼ひそかに心配を致して居る次第ですが、若しそんな事でもありません<sup>あしかず</sup>したら不悪願ひ上げます。或は御送りするのが非常におそくなつたのかとも、かれこれ心配致して居りますが、さうでなくたゞ御多忙なのだったから何より結構です。

松月・山本両氏へ御手渡し被下つたらどんな様子でしたか。作品としては自



信のあるつもりです。御寸暇の時でもかんとんに御様子伺度と存じます。

今年は雪は如何です。もうどんく降り積りましたか。正月にも間のない事、御多用の事と拝察致して居ります。ではお寒さの折柄、何卒御身御大切に願います。乍終奥様へよろしく御願申上ます。

十二月十八日

大亦観風

東平三郎様 侍史

「封筒、消印「目黒」□ 12. 18」

越後小千谷町下町

東忠楼

東平三郎様 侍史

「封筒裏」

十二月十八日

一九四二年(昭和一七)

35 一月十九日付

拝啓。その後は御無沙汰を致して居ります。御帰国になってから一度御様子を御たづねしやうと思ひながら、かれこれ多忙のまゝに失礼いたしました。その後如何です。御地は東京よりは寒気も厳しい事と思ひますが、暖かくして御休みですか。御見舞客や御喜びの人々に応接して御無理をしないかと案じて居ります。何卒、今が一番大切な時、御自愛を願上ます。御老母様が嘸御喜びだったらうと御察しいたして居ります。此度は奥様の御心配は大変でしたでせう。御疲れも出ませんでしたか。少時御保養されたら如何かと存じます。よろしく御申伝へ被下い。奥様がこちらであられる時、あの部屋に炬燵をして、こうしてあゝしてといろく御帰国後の準備を話して居られましたが、御養生なすってゐらつしやる事と存じます。又、何か東京の方での御求めのものでもありましたら、御申さけ下されば何時でも御送り申上ます。食べ物等はそちらの方が豊富でせうけれど、他のもので入用のものがありますれば、すぐ御送りいたします。

小千谷の人々も、こんど快復して御帰りになったのを見て、さぞ驚いたこととせう。マア何卒、御無理をなさらないで下さい。到々御出発の御見送りは出

来ませんでした。御疲れはありませんでしたか？

十五日からと云はれてゐた手本、ぼつとやりですか。マア一度には進みません。でも気永に筆をもつて何かかいてゐるのが面白いのだといふ気持ちでやりになる事を御勧め申上ます。少ししてから、高野さんでも、照専寺さんでも一処にやられる様になるとすれば、お互ひに見せ合ひ、はげみも出て一人でやられるよりは面白いと思ひます。時々書いたものを持寄つて見る事です。ね。二月に一回でも三月に一回でも、遊び旁々出張しませう。近いのだから。東京から関西へ謡の師匠が出張するのさへあるのだから、それから見るとずい分近いのですから、何でもありません。次に私の方、家内の病氣、漸く起きられる様になりました。マア当分そつとおかなければ、又病氣になられると困ると思つて居ります。何んしろガラスびんみた様な危い身体ですから。いろく御心配をいたゞきまして難有御座いました。御帰国の時、頂いたパンだの、卵だの、果物などの御蔭様で栄養が付いた様なものです。中々こちらで得られないものばかりなので、家内も呉々も御礼を申上げて下さいと申し出でました。

さて、此程は御結構なものいろく御送り頂きまして難有く拝受いたしました。小包の字も御自身の字なのを拝見して、だんく健康になられたなと嬉しく存じました。中に御賜のタバコがあり、何やら勿体なく感じ拝礼して、早速神棚に上げましたが、あれは昨年の記念のではありませんか。あの中から一本だけ頂けば結構です。少時おあづかりしておきますが、又、巻烟草のケース。あれも此程御願申しました様に少時拝借させて頂きます。一つ一つ包みをといてゐて何が出てくるのかと楽しみの気持ちでした。角形の香炉、非常にいい形のものですね。中々味もあり面白いもので、何よりの珍重です。又、亀の香合まで拝受、いろく御心配り難有厚く御礼申上ます。それから一番下に「入門の御しるし」との事。之は何ともども恐入りました。こんな事をして頂いては恐縮です。どうかこの様な御心配のない様に願上ます。御療養中の御慰み、又精神修養にもならばと念じてゐる次第です。

次に過日御話申上ました関西行。先生が又、胃腸をこわして病氣になり、為に少し暖かくなつてからといふ事になりました。行けば自分の用事もあるのですが、急いで行く程の事でもないのです、マア延期して同行の出来る時を待つて居ります。何にしても、もう老人ですから万一の事があつてはならぬので、用心してゐられる様です。何にしても気候のきびしい時ですから。貴下の御身体の方も充分の御要心願上ます。こゝから一ヶ月もたつて、暖かい処へ出かけら

れるか、又、湯沢へでも出かけられる時がありましたら、又、御見舞旁々、近い処です。何時でも上ります。一日二日がけで。

それから、過日御伺いしておくのを忘れましたが、此の前、御依頼を頂きました「観音」の画は、白衣の観音でせうか。此程御持参になりました、私の小品の観音(千手観音)の様なものでせうか。聖観音でせうか。電話でも御き、頂いて、御葉書下さいましたら早速とりかゝります。

又、湯沢の高半、その他の二三人の方二色紙でも贈ってよいのでしたら、余り不見識にならない程度の方で、貴家の方からでも上げて頂いてもよいと思ひますが、御指図によっていつでもかきます。然し行く時の御土産の方がよいでせうか。この辺、よろしく御考へをおきかせ下さい。

まだ書きたい事がある様ですが、何れ又、書きます。ではくれぐれも御身御大切に願います。奥様にもわけてよろしく御願ひ申上ます。不取敢、御礼旁々御見舞まで申上しました。

十九日

東平三郎様 侍史

草々敬白  
大亦観風

「封筒、消印「目黒 17. 1. 20」」

新潟県小千谷町下町

東忠楼

東平三郎様 侍史

「封筒裏」

一月十九日

36 一月二十六日付

拝啓。過日は御手紙難有拝見致しました。段々御快復被遊ました御様子、御喜び申上げて居ります。何卒、御無理なさらぬ様、願上ます。

手本、時々やつて居られますか。出きたら清書を送って下さい。朱で直して返送いたしませう。独りでやつて居られるとイヤになって来はしませんか。友達がある方がよければ照専寺さん、高野様をさそつたら如何です。御手紙中の画、貴下の頭の形がよくにてゐるので、大変興味深く拝見しました。その内、段々

人物もかゝれる様になると面白くなります。  
此の前、一寸御伺ひしましたが、八松様の観音はどんなのに書きませうか、御葉書でも頂けばやりかけます。

大阪行きは又、翠雲先生が病氣なので延期しましたが、今の処、不定なので、そのうちに観音をかいておき度いと思つて居ります。奥様その後、お疲れも出ませんでしたか。御自愛被下様願上ます。さて食料品の事、御親切におたづねにあづかり難有存じます。家内も大分快復いたしました、マア当分、余り働かぬ程度に注意して居ります。それで、何にやら御言葉にあまへて相すみませんが、あのパンが大変結構でしたので、御序ついでの時、一斤でも半斤でも結構ですが、御厄介願へましたら難有存じますが。東京ではこの頃、とても手に入りませんので。時々御序ついででよろしいですから、別にいそぎませんから、余分に御入手出来た時に御願ひいたします。

次に新春の練筆会を二月の一日に又、画室で催します。御通知だけは幹事より致した事と存じますが。いろ／＼試筆をやつて半日遊びます。御在京だったらは是非お出で頂くのにと残念に存じます。又、御便り申上ますが、先ハ右まで。草々。

この程、いろ／＼拝受。御礼の申上様ありません。奥様によろしく御申伝へ願上ます。

一月廿六日

東平三郎様 侍史

大亦観風

「封筒、消印「17. 1. 20」一字欠」

越後小千谷町

東忠楼

東平三郎様 侍史

「封筒裏」

一月二十六日

37 一月二十六日付

拝啓。先程御手紙を差上げて、<sup>「差上げて」</sup>厚かましい乍らパンの御無心を申上げました処へ、少時すると小包を頂き、菓子・玉子と書かれてあるので、これは／＼どう



も何とも御礼の申上様もないことだと存じました。家内は大喜びで歓声をあげる有様で、実に感謝の他ありません。玉子などは送って頂くのも恐縮だし、又、危険でもあるし、御遠慮を申してゐたのでありますが、実に養生には何よりのもので、全く御礼の申上様ありません。

開けて見ますと、いろいろ頂戴物がある度に、大喜びの声を上げるといふ有様です。玉子も無事でした。実に頑丈な包みにして下すつてゐたので、このこれ易いものが、完全なのに驚いた程です。それに何より好物な餅。今年の正月は四、五日でなくなつてしまつたので、やうやくにとつて置いた床の間の鏡餅が十日頃まであっただけなので、これは私が歓声を上げた次第。実は照専寺さんへでも頼んで頂かうかと思つた程だったので、何より難有存じます。実に東京では得られない、本当の餅のやはらかさ。マア大切に頂きます。それから箱からいろいろ出てくる度に大喜びする家内、相恰をくづしてゐる処を御想像下さい。パンを沢山頂けましたので、之は病後の養生に何よりです。又、葡萄酒・バタ、いろいろ何とも全く感謝の他ありません。兵隊さんが慰問袋をあける時みた様な感じでありました。羊かんも大切に頂き度いと思つて居ります。どうも何とも恐縮で、この御心づかひ、難有厚く頂戴いたします。この程のといひ、この度のといひ、度々で申訳ありません。何卒、奥様にもわけてよろしく御伝へ被下い。

家内の方の身体もだん／＼快くなつて来ましたから、御放念被下い。この玉子を頂けばきつと元気になること、思ひます。葡萄酒までも御心遣ひ、感謝に堪へません。何れ家内よりも御礼申上げる事と思ひますが、先ハ不取敢、御受け御礼まで。草々。

一月廿六日

大亦観風

東平三郎様 侍史

「封筒、消印「17. 1. 27」」

越後小千谷町下町

東平三郎様 侍史

「封筒裏」

一月廿六日午後

## 38 二月十五日付

其後、御無沙汰申上しました。度々御結構なるもの御送りいたゞき、何とも御礼の申上様ありません。その節、早速御礼申上げる筈の処、その日、丁度例の会の新年会の日で、その翌日、その翌日といつ／＼忙しくなり、つひ御礼も遅れまして相すみません。その後又、パンを御送り給り、家内は実に大喜び、皆で感謝しながら頂いて居ります。その後、家内の病氣、発病の時から四、五日寝たらよいといふのが十日程もかゝり、起きてかれこれすると又、工合がわるくなり、寝たり起きたりして居りましたが、この頃、少しよくなつて働いて居りますが、まだ本当ではないやうです。

さて、此程の新年会の写真が出来ましたので、お目にかけます。今年の積つた雪ではじめてでしたが、その為、来会者も五、六人は欠席でしたが、それでも相当盛にかきました。一枚の写真は、貴宅にある「橋立風景」の展覧会の時の写真です。

さて、この新年会後、二、三日して学校から美術の講演をたのまれ、六日の日午後一時から六時まで通してシャベリつゞけ、足が棒の様になりました。聞く方もよくきてくれましたが、少し気の毒でした。それが非常によかつたと見えて、今度はそれを教育会で話してくれとの事で、こんどは六百人位集る予定だからとの事で、今、準備中で、こんどの二十一日にやります。こんな画以前の事でもかれこれ忙しく時間をとる処へ万葉画の本になる為の用事が毎日出来て、弱つて居る処です。

そんな事で御礼状も段々遅れまして、頂く時は喜んで頂きながら、御礼も申さないで、相すみませんでした。奥様にもわけてよろしく御願ひ申上ます。

この間、用事であちこち駆け歩き中に三越でありふれた海苔の様なものでつまりましたが、他にお目にかけて喜んで頂ける様なものも見当らず、御贈り申上しましたが、のりは胃にはよくないかなと心配しながらお目にかけましたが、香りだけでも東京を味つて下さい。本当に引つゞき御心尽しを頂戴いたし御礼の言葉も御座いません。

白衣観音の方、承知いたしました。二十日過ぎ御送り出来ると存じます。領収書の方も承知いたしました。

三月中頃、湯沢へお出での由ですが、湯沢は小千谷よりも尚寒冷なのではありませんか。尤も温泉があるからそれは結構ですが、どうか御用心願上ます。中旬過ぎは一寸忙しくなるかも知れませんが、一、二日位どうかして御見舞

旁々お伺ひいたします。御序<sup>ついで</sup>で同好者の方々よろしく願上ます。色紙の事、承知いたしました。持参いたします。

御手紙によりますと奥様、神経痛になられた御様子、然し御快方で御結構ですが、マア充分御養生願上ます。暮からの御介抱と御心配で嘸かしと思つて居りました。然し奥様が御丈夫になられたら、やっぱし貴下だけは早く床につかれたらよいではありませんか。十二時前の一時間早く寝るのは十二時後の三時間にも当るさうですから、御壮健にまかせてやられると、後が心配ですから、御用心願ひます。

原先生の検査の結果、実に何よりの事でした。万々歳です。癌でなかった事が大安心です。然し、今の戦争ではありませんが「勝つて兜の緒をしめよ」で、尚一層の食養生、充分の睡眠、無理をせぬ事を願上ます。まだく之からが男の働き盛りですから。私も氣をつけて一生懸命にやりますから。

さて、画の稽古の方は仲々御多用でさう出来ないでせう。マアゆつくりなされたら結構です。

東京は今夜から又、雪が降り、今年の二回目、一日と今日の十五日とです。今日、朝からこの次の講演会の下準備中です。本になる原稿もかき、画の方もやり、中々忙しくして居ります。

この頃の毎日の戦況に難有い日本の国に生まれた事を感謝致してゐる次第。誰方も御同慶の事です、日本精神の強さに感謝させられます。銃後でもやはり同じ日本人だといふ感を強くいたします。此の間の講演でも大いにこれ話を話しましたが、聞いた人の話では、「オトナシさうな顔をしてゐるが演壇にたつと随分シッカリした話をする。国士的な人ですね」と云つたといふ。熱をこめてやつたので、そんなに感じたのでせう。この次のは尚一つ懸命にやらうと考へて居ります。

此の間頂いた御手紙を家内と共々拝見いたしました。御様子がわかつて大安心いたして居ります。然し奥様は尚、御自愛願上ます。何れ又、御便り申上ますが、後れながら御礼まで。奥様によりしく。草々。敬具。

二月十五日夜

大亦観風

東平三郎様 御侍史

「封筒、消印「17. 2. 16」」

越後小千谷町下町

東忠様

東平三郎様 侍史

「封筒裏」

二月十五日夜認む

注

<sup>1</sup> 福田道宏・奥村一郎「小千谷 東忠あて大亦観風書簡一」『広島女学院大学国際教養学部紀要』一号、二〇一四年、七六―四九頁。

<sup>2</sup> 標高は国土地理院ホームページ「地理院地図(電子国土Web)」(<http://maps.gsi.go.jp/>)による。

<sup>3</sup> 福田「近世・近代の絵描きたち、知られざる奈良とのゆかり<sup>⑬</sup>」『月刊奈良』四八五号)

<sup>4</sup> 雑誌『月明』・『詩と美術』でそれぞれ「万葉歌蹟行脚」・「万葉歌蹟行脚余話」を一九四一年から連載をしている(前掲注3「近世・近代の絵描きたち、知られざる奈良とのゆかり<sup>⑬</sup>」)。

付記

脱稿後、財団法人小千谷市産業開発センターにおいて二〇一八年四月二十八日から五月六日まで東忠旧蔵作品による大亦観風展が開催される旨、報せを受けた。